

とよま
旧登米高等尋常小学校校舎

Former Toyoma Higher Jinjo Elementary School

学校建築の変遷を伝える
明治中期の和洋折衷校舎

宮城県登米市の登米高等尋常小学校は明治21(1888)年の創建。欧州を視察した建築家・山添喜三郎と、地元の大工や気仙大工が造り上げた明治中期特有の和洋折衷様式を特徴とする。木造ながら堅牢な造りで、130年余にわたり受け継がれている。国指定重要文化財。



バルコニーや欄干など、西洋風の要素を加味した校舎。朝礼時、校長はバルコニーから訓示したが、雨の日は廊下に児童が整列した。



明治初期の擬洋風建築に比べ西洋風装飾は控えめとなり、廊下の配置なども変化した。校庭を囲むコの字型の校舎は、先生が児童に手を広げる形ともいわれる。吟味した素材と大工の技による堅牢な造りで水害や地震に耐え、今日に至っている。



①鼻隠し板の装飾 ②学間にゆかりのあるふくろうを表したとされる腕木 ③イオニア式柱頭



六方(昇降口)。技術力を誇った大工達でさえ苦労したという西洋風のトラス構造を現しにしている。強度に優れた蟻(あり)組の組手が見られる。



切妻屋根、格天井という和風の造りに西洋風の欄干・柱を組み合わせたバルコニー。床には腐食防止のため亜鉛板が敷かれている。



当初、教室には照明がなかったが、片廊下式の採用で教室の両側に窓が作られ、日光が十分に入った。一方、まぶし過ぎないように漆喰壁を白色ではなくぬすみ色にして児童の目を守る工夫もしている。



2階校長室。窓からバルコニー越しに大通りが見える。そこには江戸時代、家老の屋敷が並んでいた。

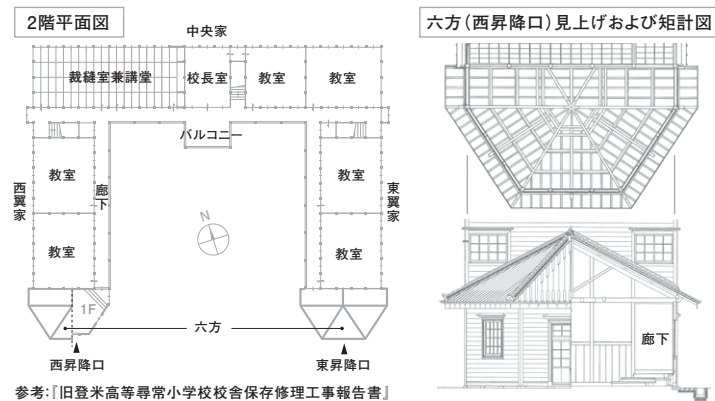


昭和18年の改造でできた裁縫室兼講堂。板敷きの2教室の間仕切りを取り、76枚の畳を敷き詰めた。

登米高等尋常小学校はコの字型の平面をもち、校庭を抱くように素木造2階建の校舎が建っている。中央部にバルコニーのある白色ペンキ仕上げの玄関、両翼にはその形状から六方と呼ばれる児童用昇降口の建物が付く。設計・監督を務めた山添喜三郎は、明治6(1873)年のウィーン万国博覧会に大工棟梁として参加、神社や商店といった日本家屋を建てた人物である。博覧会后、日本人建築家として初めて欧州を視察。西洋建築の知識を得て帰国し、明治18年頃、宮城県技士になった。一般に、明治初期の学校建築は一文

字型、中廊下式が多く、窓は教室の片側にのみあるが、明治21年創建の登米高等尋常小学校は片廊下式となり、両側にガラス窓をしつらえて十分な採光が得られるようになっていた。また、擬洋風の建物は、初期には洋風部分の大半が体裁の真似に過ぎなかったが、ここでは小屋組にキングポストトラスを採用、実際に使用できるバルコニーも造られた。玄関の柱にみられるイオニア式柱頭やフルーティング、バルコニーの手摺り子、X型の筋交いを持つコロニアルスタイルの手摺りにも山添の西洋建築の知識が生かされている。一方、

出入り口や窓は引き違いに、教室・廊下は竿縁天井にするなど、伝統的な和風の特徴も備える。初期の擬洋風建築とは、和洋折衷という点は共通するが洋風の取り入れ方が異なり、明治期の学校建築の変遷を感じさせる。山添は地盤補強のため、岩盤に達するまで木杭を打つなど基礎工事にも十分に手間をかけた。瓦や材木も厳しく吟味し、膨大な量を不合格として使用せず、そのために請負大工が破産したとする逸話も残る。こうして造られた堅牢な校舎は今日まで長きにわたって受け継がれ、貴重な遺構となっている。



用語説明

【高等尋常小学校】旧教育制度で尋常小学校と高等小学校を併設する小学校。
【気仙大工】近世、岩手県気仙地方で発祥した大工や左官の集団。技術の高さで知られた。
【ウィーン万国博覧会】オーストリアのウィーンで開催。日本政府が初めて正式に参加、出品した。
【イオニア式】古代ギリシャ建築の列柱様式のひとつ。
【フルーティング】ギリシャ古代建築の円柱に見られる溝。
【コロニアルスタイル】植民地時代のアメリカで発達した建築様式で、イギリスの古典主義建築をとり入れ、新大陸向きに実用性を加味したもの。
【ベディメント】窓や扉などの上部の壁に設ける三角形の装飾。

協力・株式会社とよま振興公社
〒987-0702 宮城県登米市登米町寺池桜小路2

